
THE・神様ペン

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE・神様ペン

【ノード】

N4508F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

神様ペンを持った美少女がすることとは?

いきなり何の題名なのだと思つだらうが、実は・・・。

「私が説明するわ。とある日、私は学校から帰る途中に、道端にペンが落ちてたの」

彼女こそが、この小説の主人公の立花たちばな茉莉亜まりあです。
そして、ペンの正体は、神様になれちゃうんです。

「ペンに沢山の機能があるの。例えば、自分の姿を別にしたり、書いたことが本当になる」

多色ボールペンみたいに、ノックをするとその能力が使える。
何にでも変身すると言つたが、人間以外にもだ。人間の気配を消すことも出来るから、自分の姿が見られることも無い。
簡単に言えば何でも出来るペンということだ。

「でも、今の生活に不自由は無いわ。だから必要無いと思ったの・・・
でも、友人の陽菜ちゃんが困つてゐる事件があつてね」

「とある人が陽菜ちゃんを騙して学校に来させなくしたの。陽菜ちゃんは、ショックで引き籠もった」

ちょっと暗い話になりそうだが、一応メインは、コメティーです。シリアルにコメティーと交互に、を田安としてます。さて話が脱線したが、戻そう。

「だから、ペンでいたずらしきやおひ、との事なんです」

ほほ、復讐よりもそちらがメインのような気がする。

「さて、学校に行きます。とある人がいるらしいから」

スキップしながら歩いてる。周りの人達は、なんだコイツ的な顔で見ています。

別に恥ずかしいのは、茉莉亞ですから良いんですが。

「……さて、ペンを使いますか」

学校の門に着いたら、周りを見渡してからペンを使った。力チツと音が鳴った途端に、茉莉亜の姿は消えた。正確には、茉莉亜は周りから見えない。だけど、茉莉亜自身はいる。

気配さえも消えたから、どれだけ気配を読むのが上手な人でも、茉莉亜の気配を読める人はいない。

「（入りますか）」

流石に声はバレてしまつので黙る。

静かな廊下に、コツコツとローファの音が鳴り響く。ついでに、外用の靴です。

我が儘気質なので、彼女を止めれる者はいない。

「（いた・・・はあ）」

どこの教室の入口で、顔だけを中へ向けた。色々考えてるうちに疲れてしまつてゐる茉莉亜。

「（ん・・・？）」

「あ、いや、中の中の奴は、電話で機嫌良くなってる。

「ああ……アイツに罪が被つたよ。地味な分際で、レオ様に近付いたからだ」

「（レオ様……？）」

知らない単語が出て頭を傾げる茉莉亜。

それよりも、罪が被つたって意味が分からなかつた。

「（もしかして……あの噂は本当なのかしら？）」

テストの答えが、誰かに盗まれたと言つ噂があつた。
でも、それは陽菜の鞄にあつたと噂で、皆から嫌われてた。
でも茉莉亜が言つてる噂は、生徒の個人情報が洩れてるところ
じだ。

誰かが、売つてるのだろう。

「そういや、お金渡されて無いよ」

「（お金？）」

中の奴の不審な発言に悩む茉莉亜。

「売ったんだから渡してよーー。」

「（やつぱり……）」

中の奴が犯人か……と睨む茉莉亞。すると、どこからか音がした。

「だれ！？」

「（バレた？……いや、私は見えないし）」

周りを見渡したが、誰もいない。
いや……あと一つ、隠れられる場所がある。でも、そこは隠れられるとは別物だ。

「（……憐れかな。まあ助けるか）」

ペンを使った。書いたものは、時間よ止まれ。すると、周りの時間は止まつた。
茉莉亞は、とある場所に向かった。

「なんで掃除用具なのかしら？」

「ゲシッゲシッ」と軽く蹴った。次は、さつきよりも強く蹴った。

「変な擬音がしたけど無視ね」

「うう～助けてよ・・・」

中から情けない声がした。

「えっと・・・何で?」

「ペンを使つたはずなのに」と言つた茉莉亞。

「・・・ぐうーん

「い、犬?」

掃除用具を開けたら、犬耳が着いてる男子生徒。実際に着いてる
んじゃなく、妄想の域にいつてる。

「ねえ・・・イヌ」

「犬じゃない！…真耶です」

少年の名前は、真耶らしい。

茉莉亞からいは、イヌと名付けられた。

「何してゐるの？ イヌ」

「…………もう戻りです。僕は……」

「こじめ？」

詰まつた真耶に勘が働いた茉莉亞。

「うん……」

「ふ～ん。でもね、ここにいたら危ないから帰りなよ」

不思議に思いながらも顎を歸つてつた。

「さて、時間を戻そつか」

ペンで書いた。「リート」と。
すると、時間は動き出した。

「（でも、なぜイヌに私が見えたのかしら？）」

謎は謎のままなのか？後で、分ると……思いたい。

「あの女……ただじや済まさない」

「どう、許さないの？」

今まで誰もいなかつたと思つてたのに、誰かが現れたのに驚く。

「お前は……」

「陽菜ちゃんのカタキのつもりで来たんだけどね」

「……何の？」

「話を逸らす奴。一応女だが、茉莉亞自身はコイツが気に入らないから名前で呼ばない。

「……言訳は無理ですよ？」のトープに頭の声が録音してゐるわ

「うわだー！」

確かに、いつの間に録音したのだろう。

神のペンを使えば時間を戻して、録音は出来る。

ペンには、未知なる能力がまだあるらしいけど語れません。

たくさんあり過ぎて。

「ほりつ・・・」

茉莉亜が取り出した、カセットテープの再生を押すと、さつきまで喋つてた内容が聞こえてきた。

女は、青ざめている。

「さて、警察にも校長にも言えば良いんだけどね・・・」

「な、なんでもいい」と聞きあすからーーー

女の発言に、ニヤリと笑つた。

「じゃあ明日ね、陽菜ちゃんが来るから、その前に蹲を全部消してね。もしダメだったら・・・」

あえて最後まで言わなかつた。
女は、何度も首を振つた。

場所は変わり、陽菜の家。
勝手に部屋に入った。靴は脱いでます。

「・・・茉莉亜ちゃん」

「ひつさしふり～陽菜ちゃん」

顔色の悪い陽菜に驚いた。

「明日、学校行くよ？」

「・・・いや」

予想通りの反応に苦笑いの茉莉亜。

「解決したから、明日は大丈夫よ」

「でも・・・」

まだ領かない陽菜に悩んだ茉莉亜。その時、ガチャツと扉が開いた。

「行きなよ陽菜・・・この子の通り大丈夫だから

見たことの無い男の子が現れた。
どこかで見たことがありそうだが、分らない。

「レオくん」

「ん？・・・もしかして君が元凶？」

あの女が言つてたレオがいるのだ。

「もしかして恋人同士？」

「ふふ・・・お兄ちゃんだよ」

「え・・・」

陽菜の言葉に疑問符が出る。

一人つ子だつたはず、と言つてた茉莉亜。

「オレは、外国にいたから」

「しかも、有名人なんだよ」

そういえば、テレビでも見たことがあった。
でも、それ以外でも……。

「最近、帰つて来てな……」

「年子なんだ……」

ううん、と、まだ悩んでる茉莉亜。
それに苦笑いのレホ。

「あ……イヌ……」

「やつぱバレた?」

学校で現れた、いじめられてた少年。
でも、なんで分らなかつたんだね?へ。

「君と回^ジだからかな?」

「回じ~。」

レオの言葉に不思議に思つしか無かつた。

「本名は、レオ。真耶は偽名なんだ。で、君のペンと回じ~

「え・・・」

なんでペンの」と知つてゐるのに陽菜ちゃんにも書つてないのこ、
と思つた。

「」のマスクが変身出来るんだ。自分の望んだものな

「だから私のペンが効かなかつたんだ」

やうだ、と言つた。

「あの性格も嘘?」

「ああ、これが本当だ」

なんか傲慢な性格で、茉莉亞と良い勝負だ。

「ふうん」

「な、なに？」

茉莉亜は、レオに近付いた。

顔が近いためか赤くなる。

それに気付いた陽菜は笑つてる。

「演技だつたんだ・・イヌ」

「イヌは止めて・・・」

苦笑いで、茉莉亜を押さえるレオ。

「とりあえず明日来てね」

「う、うん」

約束を取り付けて、さつさと帰つてつた。

「おはよう陽菜ちゃん」

「へ、うん。おはよー」

「私を信じて~」

辛そうに挨拶してくる陽菜の頭を撫でる。

領いた陽菜の手を掴んで学校に向かつ。

「お、おはよ~」

「おはよーーー陽菜ちゃん」

まさか、挨拶をしてくれるとま思わなかつた陽菜。
嬉しそうに今までで一番の笑顔を見せた。

「・・・ねえ。あのカセットテープってどうあるの?」

「やつぱイヌ・・・いたんだね。あの場所に・・・」

レオが茉莉亜の背後に立つて言った。

帰つたと思わせておいて、隠れてたんだ。気付かなかつた茉莉亜。

「使わせてもらひよ?大事な親友を傷つけたんだから、それだけで助かると思わないでもらいたいわ」

「・・・悪魔だな」

素に戻つてゐる、と茉莉亜は言つた。

レオは、さつさと自分の教室に向かつた。

つてか、違う教室に閉じ込められてたんだ。

「もしかして、イヌがいじめられてた理由つて、可憐過ぎていじめ

たいつて女子がやつたの?」

まさかね、と思つたが妙な寒気がした。

「とつあえず今日の夜までの命ね・・・」

茉莉亜の手には、カセットテープなんかは無かつた。
たぶん、あるべき場所に行つたのだろう。

注意事項。

友人をハメてはいけない。

神のペンを持つ者に逆らってはいけない。

神と聞こえは良いが、実際は悪魔だ。

ハメた者は行方不明になつてしまふ。

神が相手だと、味方は誰もいなくなる。

(後書き)

こんなペンがあったら良くなあと思つちがつきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4508f/>

THE・神様ペン

2010年12月31日07時35分発行